



湘南鎌倉総合病院（神奈川県鎌倉市）院長代行、腎臓病総合医療センター長

小林 修三



こばやし・しゅうぞう 1980年浜松医科大学卒業（1期生）、同第1内科入局。86年同大学院博士課程修了。88年米国テキサス大学サンアントニオ校病理学客員講師。99年湘南鎌倉総合病院副院長。2017年より現職。日本内科学会（評議員）、日本腎臓学会（評議員・指導医）、日本医学治療学会（理事）、日本フットケア学会（理事長）、日本急性血液浄化学会（理事）などに所属。

私とクラシック音楽

音楽は神への贈り物であり、ムジカフマーナ（人間の音楽）は宇宙や人間の心身を調律するものであると考えられています。音楽は神に近づけてくれる大切な手段であり、医学と音楽は極めて近い関係にあったといえます。中世のヨーロッパでは、医師になるには算術・幾何学と天文学そして音楽を学ばなければなりませんでした。

私とクラシック音楽との出会いは12歳の時です。わが家は長唄や三味線の音が毎日聞こえてくる環境でしたが、クラシック音楽は一度も聴いたことがありませんでした。そのわが家に「ステレオ」がやってきたのです。しかし、何を聴いたらいいのかわかりませんでした。当時、私に勉強を教えてくれていた大阪大学医学部のお兄さんが、それではと、ベートーベンの交響曲第5番「運命」と第8番を収録したLPレコードをプレゼントしてくれました。ハンス・シュミット＝イッセルシュテット指揮、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のものです。このレコードは今も手元にあり、それこそ擦り切れるほど聴きました。私は「運命」よ

りも第8番第3楽章のクラリネットとホルンの掛け合いが好きでした。

そのお兄さんは後に外科医になられ、大阪の大きな病院の院長として活躍されました。私を医学とクラシック音楽の道に導いてくださった、まさに人生の恩人です。先生と私は大阪の天王寺高校の先輩、後輩という関係で、先生の影響で自分もクラリネットを始めました。

入学したのは浜松医科大学で、私たちが1期生ということもあり、あれほど入りたかったオーケストラもまだ存在していませんでしたので、市内の室内楽団で多少演奏しただけで、結局は45歳まで一度も演奏することなくこのクラリネットはお蔵入りの状態でした。ところが、現在の湘南鎌倉総合病院に赴任後、一念発起して音楽院の先生の下で毎週日曜日1時間のレッスンを受け、5年後には室内楽を皆と楽しむことができるようになりました。同じ頃、NPO法人「癒しの医療を考える会」を立ち上げ、理事長として活動しています。現在会員500名の団体で、年2回、プロの音楽家を集めて、春は湘南鎌倉フィルハーモニック管



還暦記念に娘たちと演奏。ピアノは長女有沙、ピオラは次女美樹でモーツァルトのクラリネット三重奏を演奏。

弦楽団の演奏、秋は室内楽を企画してきました。

私は、こうした舞台で「作曲家の病と音楽」と題して、毎回取り上げた演奏曲目の作曲家の死因やその死に至る経過を聴衆に話してきました。これが、『ベートーヴェン・ブラームス・モーツァルト～その音楽と病』（医薬ジャーナル社）として世に出ました。

クラシック音楽はいつも自分を励ましてくれます。どの曲が好きですかと尋ねられたら、迷いつつもベートーベンの「バイオリン協奏曲」と答えます。この曲を聴くと、亡くなった父を思い出します。臨終の床でこの曲がFM放送から流れていました。その時には曲名を知りませんでしたが、その後ベートーベンのバイオリン協奏曲だと分かりました。聴くたびにあの日を思い出し目頭が熱くなります。クラシック音楽とはそうしたもののではないのでしょうか。

2人の娘たちはそれぞれピアノとバイオリンのソリストとしてプロ活動をするようになり、家族がそろって音楽の話で盛り上がります。



写真左：オーケストラとの共演は山田和樹指揮、湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団（現）。写真中：グリンカ作曲の悲愴三重奏を演奏。写真右：演奏会の合間に元テレビ朝日キャスターの朝岡聡さんと作曲家の病と音楽を語る。